



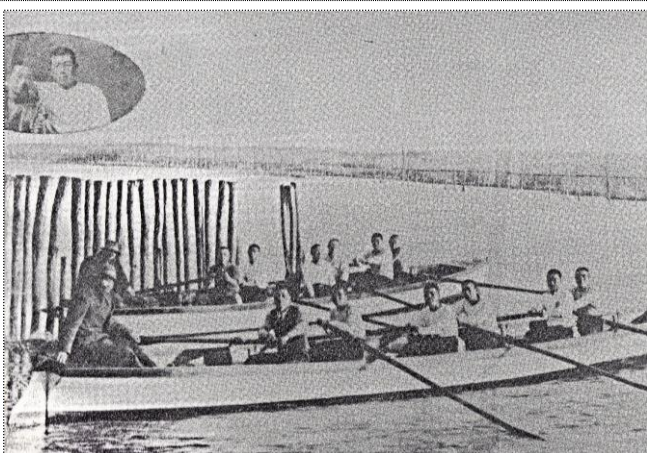
進修同窓会HPにアクセス

霞ヶ浦遠漕……1909 [明治42] 年の鹿島遠漕 2

川口の艇庫を出発した土浦中学生のボート2隻は、田村弁財天、沖宿、大山鼻を経て、やがて三叉沖に差し掛かりました。今号でも、5年橋本芳雄(中9回)の「鹿島遠漕記事」(1910 [明治43] 年1月発行『進修第13号』所収)と尾崎楠馬先生の日記とで、この遠漕を辿っていきます。

《 》内は尾崎先生の日記の記述で、引用文中の【 】内は筆者による注記です。旧字体は新字体に改めました。

なお、遠漕の航路図を進修同窓会HPの『月刊 Acanthus』第176号3頁に掲載しています。



1920 [大正9] 年ボート部遠漕 (『土浦中学生と霞ヶ浦』より)

「鹿島遠漕記事」 橋本芳雄 八月九日(第一日)

是からが即三叉沖【みつまたおき】^(注)。筑波山は、雲の間から首を出して、乗せて行つて貰ひた相な顔をして居る。向側の相見崎【歩崎】が、高く湖上に屹立【きつりつ】し、頂【いただき】に老松を戴いて居る様は真に雅致【がち みやびやかな風情】がある。

高浜入も見える。汽船が木原【美浦村木原】の方から来て追ひ越して了ふ。帆をゆるく張つた船が二ツ三ツ浮んで居る。実に静かな景色だ。やがて又漕ぎ出した。浮島^(注)がだんく大きくなる。忽焉【こつえん にわか】に忽然【と水中から出て、緑樹鬱蒼【うっそう】と茂つて居る、真に詩的な仙境だ。彼の「青山白雲」のお光【おみつ】^(注)が、天真の美声で歌ふたのは此処だ。四圍の風景が面白いので、手の痛さも忘れて漕いだ。白帆【帆曳船】などは忽に抜いて了ふ。実に愉快だ。岸の比較的平地に二三十戸軒を並べて、村が見える。全く風が無いので、前の大船^(注)は帆を下した。麻生は左手にキラキラと光つて見える。牛堀^(注)の前で、皆跳込んで、汗を流し暑を凌いだ。それから皆、桜は赤、霞は青のユニホームを着た。互に赤がよいの、青の方が詩的だ等と自慢し合ふ。無邪気なものだ。勢【いきおい】を付け、オールを揃へて牛堀へ漕いで行つた。

艇を繋いで【で】上陸すると、子供等は珍らし相に駆けて来る、女達は「此の暑さにまあ……」と云つて驚く。亀城の

健児頗る得意だ。時に十時少し過赤や青の着物を着た黒ン坊共が長い脛を出して、跣足【はだし】で揃つて行く所は実に天下の奇観だ、それに尾崎先生が白い着物に袴をつけ、肩に鞆を掛けた姿は、若し法螺【ほら】の貝でも吹けば山伏【やまぶし】山中で修行をする修験道の行者【姿そつくりだ。村の人々が駆出して見るのも無理はない。村の後の台に上つて弁当を平げた。今自分等の来た方が手に取る如く見える、汽船が一隻波を左右に開きつゝ【横利根川を】佐原の方に進む。緑の間に佐原の町が隠見【いんけん】して居る。実に善い所だ。

飯を食つて腹が張ると目が弛む【ゆるむ】、老松の下で昼寝がしたくなった。卅【三十】分程休憩の後飲料水を積んで出発した。

《牛堀につきしは十一時なりこれより午食【ごしょく】し正午潮来に向ふ沿岸の人家往来して聊か【いささか】心



北利根川上空から西浦を望む (茨城県広報広聴課提供)

を慰む

今度は細い所【北利根川】で両側は堤、無味単調だ。休んでから、ぐつと力が抜けて了つた、左の台に細い曲つた松がチラホラ見える。何と無く古戦場の趣がある。やがて潮来に着いた。これから北浦に出るまで【の前川】は尚狭い。やつと短艇が一隻行ける位だ。左側は人家右側は堤、面白くない。小児等が、側をつき廻つて、一！二！と怒鳴り、少し一方が後れると、あれ負かされた、やあい／＼と囁す【はやす】、堪つ【たまつ】たものではない。

やがて三里【1里は約4km】の間も過ぎて北浦に出た。出口の両岸は洪水の為に破られたとかで、連り【つらなり】に堤防を築いて居た。大舟津が見える、我等の手並を見するは此時にありと一同バツクをきかせたが生憎【あいにく】一人も見て居らなかつた。新しい学校【豊津小学校】があつて、側に丁度適當の所があつたので、其処に舟を入れた。すると突然小使がやつて来て、何処から来たかと怒鳴つた。土浦中学校ですと答へると、口の中で何かブス／＼云うて御座る。やがて尾崎先生との間に交はされた会話は、頗る面白い。

先生「校長さんは居りますか。」
小使「居ネー。」
先生「何処へ参りました。」
小使「いとつっけんどんに」「銚田」「教員研修会が開催されていたようである」
先生「今日帰りますか」
小使「けいんねー」

先生「他の先生は居りますか」

小使「居ネー。」

先生「では仕方が無い。此荷物を明後日迄校内に置いて貰ひたい。」

小使「乃公【だいこう】 自称の人代名詞。おれさま。我が輩。男性が自分自身を尊大に言う語】には分んねー、役場へ行って聞くがい。乃公は留守番を頼まれた許りだ。」

小使さん大威張だ、余儀無く役場へ行って許しを受けて来て此留守居番殿に復命【ふくめい 命令を受けた者が、その経過や結果を報告すること】に及ぶと、「ちく（嘘）だらう」として中々承知せぬ。不得已【やむをえず】役場の小使に来て貰って、やっと納得させた。実に頑固な親爺だ、やがて煙草銭をやらうとすると「いんねー（要らぬ）」として中々受けぬ。此の時の口調と手付とは千ちゃん（渡辺）【渡辺千城（中10回）】でなければ真似は出来ぬ。以後頑固者は「鉾田」と呼ぶ事にした。《二時十五分大船津着、頑固の留守番を村役場の助けにより承知させ道具を預け……》

これから川澄野口の両君と僕とで鹿島の【高木】小学校に交渉に行った。小使許りしか居なかつた。又矢張り「鉾田」とかと思ふといと丁寧だ。「校長は不在ですか【が】、三十町許りに居る」と云ふ。道もよく教へて呉れたので、行って面会し、校舎を借りる許しを得て帰った。

かくする中に大分暇取つたので、一同鹿島へ来た時は黄昏【たそがれ】時分であつた。

《先発の帰り来り報ずるを俟つ【まつ】 こと三時間ばかり遂に迎へ来るあり共に行き鹿島高木小学校に宿る》

茲に一つ問題が起つた。それは役場と校長と両方我々の為に尽力をして呉れたが、その間に齟齬【そご】を生じ、大いに困つたが、尾崎先生の円滑なる交渉でやっと無事に済んだ。初め我々が双方へ便宜を与へてくれと頼んだのが悪かつたのだ。とんだ失策をした。小堀と云ふ宿屋へ三々五々飯を食ひに行つた。夜になると、もう疲れて了つて、初めの中は「ゴールドメガネ」や「デカンシヨ【節】」【(注6)】で大分賑はつたか【が】、間もなく大分まいって来る者も出来た。でとうく床に就く事にしたが、小さな裁縫室に十六七人も詰め込まれては、実に暑い、蚤は切りに【しきりに】刺す、蚊帳【かや】は一種厭な臭気を出す、蚊は隙を見て入り込む、実にたまらぬ。やがて尾崎先生が妙腕を振つて、オルガンを奏で【かなで】初め【始め】た。一曲一節、実に微妙、何時の間にか華胥の国【かしのくに】 中国の黄帝が昼寝の夢に見たという、無為自然で治まる理想的な太平の国【へ導かれて了つた。】

三又沖

霞ヶ浦（西浦）の土浦方面に伸びる水域を「土浦入（つちうらいり）」、石岡方面に伸びるそれを「高浜入（たかはまいり）」、この両者が交わる出島【かすみがうら】市沖の広い水域を「三又沖」と呼ぶ。荒天時には複雑な大波が生じるころから、霞ヶ浦一の難所とされている。

浮島

徳富健次郎（蘆花）は、1898「明治31」年民友社刊の『青山白雲』（過去10年の、紀行文や自然描写などの旧作を集めた、最初の文芸作品集）の中の「漁師の娘」の冒頭で、浮島の情景を次のように描いている。

「常陸の国霞が浦の南に、浮島と云つて、周囲三里の細長い島がある。二百あまりの家と云ふ家は、ずらり西側に並んで、向ふ岸との間は先ず隅田川位、おゝいと呼べば応と答へて渡守が舟を出す位だが、東側は唯もう山と島で切切つて、それから向ふへは波の上一里半、麻生天王崎の大松も、女扇の絵に画く子日の松（ねのひのまつ） 正月の最初の子の日に、小松の多い野辺に出掛けて、小松を根ごと引き抜き、松の霊力によつて長寿を願う行事における小松【位】にしか見えない。……」

青山白雲のお光

「漁師の娘」の主人公。漁師万作夫婦の娘。歌が上手く、島の若い者が「浮島名物、一に大根、二に鮎鰻、三にお光の歌」となると、よく歌う位、お光の歌を知らぬ者はなかつた。

或る年の九月、大雨大風は已んだものの、濁浪渦巻く荒海のような夜の霞が浦に、お光は、一升徳利を取り、対岸一里半の麻生に向けて小舟を出した。万作の右腕のリューマチ（関節） 腱・筋肉に痛み・運動障害を伴う病気が痛み出し、熱も出て喉も渇くと見え、焼酎を飲みたいと繰り返してがんだからである。お光の居ないのに気付いた母親が、頻りに呼んでも返事がない。

夫婦は、茶断ち塩断ちし、柳の古根に注連縄を掛け、筑波さまあらゆる神さまに願を掛けたが、お光が帰ることはなかつた。

大船

高瀬船の大船。高瀬船は、河川専用建造された帆船で、森鷗外の小説『高瀬舟』には、「高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟」と記されているが、高瀬川固有の舟ではなく、様々な型や大きさのもの、全国の多くの河川で使用されていた。

それは、船底の平らな、河川や浅海を航行するための木造帆船で、室町時代末期の吉備の国（岡山）の主要河川（吉井川・高梨川・旭川）で使われ始め、江戸時代になると各地に普及し、昭和初期まで使用された。物資の輸送を主な目的として、帆走若しくは馬や人が川岸から曳くなどして運行された。利根川や霞ヶ浦の高瀬船は、京都のような小舟ではなく、その長さは最大で30mほどのものもあり、一度に100俵（約60トン）程度の米を積むことができた。



河岸に停泊する高瀬船と川を航行する高瀬船
(茨城県広報広聴課提供)

牛堀

現在の潮来市牛堀。霞ヶ浦の東端に位置している。当時は、霞ヶ浦・利根川航路の潮来・鹿島方面、佐原・銚子方面、高浜・鉾田方面、江戸崎・土浦方面、関宿・東京方面への蒸気船や高瀬船が行き交っていた。葛飾北斎の富嶽三十六景「常州牛堀」は、この辺りを描いたものと言われている。

「ゴールドメガネ」や「デカンシヨ【節】」

「ゴールドメガネ」については不明。「デカンシヨ【節】」は、兵庫県丹波篠山市を中心に、盆踊り歌として歌われる民謡であり、明治時代には、旧制高校の学生たちに愛唱された。掛け声の「デカンシヨ」は、哲学者デカルト、カント、ショーペンハウエル（出稼ぎしよ）から、という説もある。代表的な歌詞は、「デカンシヨデカンシヨで半年暮らす、アヨイヨイ、あとの半年寝て暮らす、ヨイヨイヨイデカンシヨ」。

(高21回 松井泰寿)

アカンサス第175・176号「鹿島遠漕航路図」 → → (本文中に登場する地)

